幼児の自己主張の学年による変化

廣瀬 翔平

(立命館大学大学院文学研究科)

キーワード：自己主張, 自己調整, 仲間関係

Developmental changes of young children's self-assertion

Shohei HIROSE

(Graduate School of letters, Ritsumeikan University)

Key Words: self-assertion, self-regulation, peer group

目的

幼児の集団保育場で発生する自己主張の観察を行った。「年齢の上昇に伴う自己主張の変化」、「他の幼児の自己主張を受けての反応」の2点明らかにすることを目的とした。

方法

対象児 京都市内の幼稚園に通う年少児14名(男児7名, 女児7名), 年中児19名(男児12名, 女児7名), 年長児11名(男児6名, 女児5名)の計44名の幼稚園児を対象とした。年少児の平均年齢は4歳1カ月(3歳8カ月～4歳6カ月), 年中児は5歳2カ月(4歳7カ月～5歳7カ月), 年長児は6歳1カ月(5歳8カ月～6歳6カ月)であった。

材料 フィールドノート, ストップウォッチを用いた。

手続き 初めにラポール形成で幼稚園児にとって観察者がいることが不自然でないと思わせるように努めた。この期間で予備観察を行い, さまざまな発話や状況をフィールドノートに記録した。そしてそれをもとに自己主張と他の幼児からの自己主張を受けての応答カテゴリの作成を行った。

ラポール形成の期間終了後, 本観察を行った。ここでは1分間ごとに観察対象となる幼児を変えながら観察を行った。観察したのは対象である幼児が行った自己主張と他の幼児からの自己主張を受けての反応を観察した。各学年の観察時間は以下のとおりになった。年少児, 年中児, 年長児それぞれ110分の合計330分のデータを分析した。

結果

自己主張の生起回数において年少児と年中児の間に有意な差が見られ($\chi^2(1)=4.56, p<.05$), また年中児と年長児の間には有意傾向が見られた($\chi^2(1)=3.46, p<.10$)。次に各カテゴリについて学年による生起回数に差が見られるかを求めた(図1参照)。その結果, 依頼において年少児と年中児・年長児の間に有意差が見られた(年少児と年中児, 年中児と年長児それぞれ, $\chi^2(1)=5.26, p<.05$; $\chi^2(1)=7.69, p<.01$)。また, 質問においても年少児と年中児・年長児の間に有意差が見られた(年少児と年中児, 年中児と年長児それぞれ, $\chi^2(1)=5.83, p<.05$; $\chi^2(1)=3.87, p<.05$)。さらに報告において年少児と年中児で有意な差があった($\chi^2(1)=4.90,$

$p<.05$)。そして提案において年少児と年中児・年長児の間に有意な差が見られた(年少児と年中児, 年中児と年長児それぞれ, $\chi^2(1)=10.67, p<.01$; $\chi^2(1)=9.78, p<.01$)。

他の幼児の自己主張を受けての応答において, 年少児と年中児・年長児の間に生起回数に有意な差が見られた(年少児と年中児, 年中児と年長児それぞれ, $\chi^2(1)=6.22, p<.05$; $\chi^2(1)=18.03, p<.01$)。年中児と年長児の間には有意傾向が見られた($\chi^2(1)=3.24, p<.10$)。

図1 学年ごとの各自己主張の生起回数

考察

「年齢の上昇に伴う自己主張の変化」については以下のとおりである。年少児では依頼が多く, 提案や質問が少ない。それに対して年中児・年長児では依頼は少なくなり, 提案や質問が増加する。このように自己主張は年少児から年中児にかけて大きく発達し, 年長児ではあまり変化が見られていないという結果が得られた。しかし, 質的な面で変化が見られ, 年中児から年長児にかけても自己主張の発達的变化がみられることが分かった。

「他の幼児の自己主張を受けての反応」については以下のとおりである。自己主張を行う能力の発達は年中児で大きく発達するのに対し, 自己主張を受けて応答する能力の発達は年齢の上昇に伴って徐々に発達していることが示唆された。また, 年齢が上昇するに従って, 相手の自己主張を受けての応答の種類が増加し, より複雑になることが分かった。